

街かどに禅を探し、現代に仏教を見つける (住職記)

お供え

南木佳士(なぎけいし)という作家がいます。1951年生まれだということから、71歳になるのでしょうか。芥川賞受賞の小説家ですが、長野県佐久市にある病院の勤務医でもありました。

その南木氏が日経新聞夕刊第一面の「あすへの話題」というコラムを週に一度担当していました。

南木氏の担当は毎水曜日で、6月16日の記事の冒頭には、「若いころからテレビはよく観るほうだった」とありま

す。さて、作家のお気に入り

のチャンネルは……。

「番組表で気になると必ず観るのはNHKのきょうの料理」

だということから、おもしろい。テレビ番組でならった成果を次のように述べています。「故郷の親戚から送られてきたじゃがいもでクリーム煮を作り、切り身の塩タラの上にかけてオープンで焼く料理もこの番組で教わって作った。うまさに感激し、ゆでたいものにエゴマ味噌だけをつけて食べていた祖母の遺影のある仏壇に供えた」

これって、感動もののエピソードですね。お供えって、形ではない。あの方に、食べていただきたい、見せたい聞かせたいものを供える。それが一番なのですから。

私も最近、こんなお供えをしました。平成26年から仏



教の総合月刊誌へ連載してきた拙い文章が本にまとまりました。タイトルは『おうちで禅』。

七月十日に出版社から送られてきた最初の一冊を持って、本堂へ行きました。亡き師父の位牌に供えるためです。腐るものではないし、しばらくは置いておこうと思いい、位牌に背を向け本堂を出ようとした時、師父の大音声が天井の雲龍図のかなたから響いてきました。

「こんな恥ずかしい本を出しやがって!」。

あわてて、位牌の前にもどり、お気に召さない本を下げたのです。

さて、花岡博芳著『おうちで禅』(春陽堂書店刊)は、書店の店頭になく場合は、取り寄せてもらってください。定価1800円です。

春陽堂書店のホームページから購入すると割引があるみたいです。もちろん、アマゾンや楽天ブックスなどのネットでも購入できます。

仏教や禅の本って、特別なところでしか手にはいらな

◇右のページで、「どこでも買える本にしたかった」などと大見得をきってしまったので、本当に書店の店頭と並んでいる証拠写真をかかげました。東京都内の某店で平積みになっているのにビックリして、ある人がメールで送ってき

近くにあるだけでも畏れおおい。この春には文庫部門で週刊ベストセラーになっていました。私は熱烈な向田ファンではありませんが、「ベスト」の文字を冠した本ですから、「買っておかなくては」と思い、すでにわが本棚に積まれていました。そのなかに、「中野のライオン」と題した、十一ページほどの文章があります。そこに、「記憶や思い出というものは、一人称である。／単眼である」という一

◇『おうちで禅』が平積みになっている写真の斜め右に、『向田邦子ベスト・エッセイ』(ちくま文庫)の表紙がみえます。

節があります。「さすが、エッセイの名人」と感心して、拙書にそれとなく拝借しているフレーズです。どこでしょうか。

◇この文章を書いているのは八月二十一日。今日は、テレビドラマ「寺内貫太郎一家」などの脚本を書いた向田さんの四十年目の命日です。四十年前というと、昭和五十六年八月です。その一年半前の昭和五十五年一月から、短編小説を月刊誌に発表した向田さんは、一年間で十三の小説を執筆します。三つ

◇一人称といえば、拙書・241ページに「一人称の死」という表現もあります。これは、「日経新聞」(令和2年8月12日付け朝刊)、「死と向き合う」という上田紀行氏が書いた記事から借用しています。どういう意味かというのを、自分の死後どうして欲しいかを、

めを書いたところで、直木賞の候補になります。「連作短篇のよつだから、完結をみてからでも」と受賞を見送ろう



あらかじめ自分できめておく「私

という選考委員がいたにもかかわらず、山口瞳、阿川弘之、水上勉の三人が強引に推して受賞になったという。直木賞受賞の一年後に台湾を旅行中の飛行機事故で亡くなってしま

の死です。コロナ以前は、「息子に迷惑をかけないように自分の戒名を決めておきたい」とか、「私の葬儀のお布施を前もって納めておきたい」。そんな、相談に来られる方が、ときたまおられたのですが、昨年来、そうした声は途絶えました。外出を遠慮していることもあるのでしょ

◇さて、某書店で、『おうちで禅』と同じ棚で平積みになされていた『向田邦子ベスト・エッセイ』です。私の著作など

うがみなさん、気がついたのではないのでしょうか。死は自分では決められないし、一人では、生を完結することもできない、と。コロナ禍、まだ我慢です。(住職記)